

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年5月31日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H05697

研究課題名(和文)現代中東におけるイスラーム主義運動の動向と政治的帰結に関する比較理論研究

研究課題名(英文)Comparative and Theoretical Studies of Political Outcomes of the Islamist Movements in the Middle East

研究代表者

末近 浩太 (SUECHIKA, Kota)

立命館大学・国際関係学部・教授

研究者番号：70434701

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、大きな政治変動を経験した2010年代の中東諸国におけるイスラーム主義運動の思想的・組織的実態の調査・分析を進め、その政治的な影響に関する比較分析および一般化・理論化の枠組みの構築を目指した。イスラーム主義運動の政治的帰結は、運動自体の変化をめぐる因果推論と、運動が及ぼした政治や社会の変化をめぐる因果推論の2つによって分析することができる。しかし、現実には、それぞれの変化は不可分であり、イスラーム主義運動をめぐる「なに(what)」と、それがもたらす政治現象をめぐる「なぜ(why)」の両方の問いを組み込んだ学際的ないしは融合的な分析モデルの適用が重要であることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、長年にわたって中東のイスラーム主義運動の研究に努めてきた研究者が協働し、個別事例のさらなる実態解明を目指すとともに、その比較研究を通して、運動の帰結に関する分析枠組みの構築を試みた点にある。すなわち、社会運動論(社会学)と比較政治学とのあいだのアポリアを克服するための一視座を提供することで、従来比重が置かれてきた「社会運動を説明すること」に「社会運動が説明できること」を接続し、中東政治研究、広くは比較政治学分野に新たな知見をもたらした。「アラブの春」のような制度外のインフォーマルな政治が世界各地で顕在化するなか、社会運動の帰結をめぐる知見は政策的にも重要となる。

研究成果の概要(英文)：The aim of this project is to analyze intellectual and organizational dynamics of the Islamist movements in the post-Arab Spring Middle East and to establish a new analytical framework of their political outcomes through empirical case studies of the Muslim Brotherhoods and its offshoots. The project attempted first to explore causes that led to different political outcomes of the Islamist movements in the context of "democratization" and "security" and then to generalize and conceptualize its causal effects with special reference to social science theories such as the social movement theory. As a result, the political outcomes of the Islamist movements can be categorized into "organizational changes" and "political and social changes caused by them." However, these two are virtually intertwined; the project concludes that interdisciplinary approach based on the two with combination of "what" and "why" questions over the Islamist movements.

研究分野：中東地域研究、国際政治学、比較政治学

キーワード：イスラーム主義 中東政治 民主化 安全保障 社会運動

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

イスラーム主義運動が中東政治の趨勢を大きく左右するアクターであることは周知の事実であるが、その反面、研究の一般化・理論化が遅々として進んでいないことはたびたび指摘されてきた。その学術的背景として、相互に関連する次の3つの問題点が挙げられる。

第1に、イスラーム主義の実態解明を目指す実証研究が事例とアプローチの両面において細分化されてきたことである。事例については、中東各国の個別事例の研究にとどまりがちであり、他方アプローチについては、歴史学、思想研究、社会運動研究、政治学などの間で架橋的な研究が十分に行われてこなかった。第2に、イスラーム主義運動の内実、例えば、歴史、思想、組織の実態などに関心が集まる反面、運動がもたらす政治的帰結については十分な研究がなされてこなかったことである。第3に、政策的・社会的関心とそれに直結した論壇的な言説が、イスラーム主義運動の研究の「やせ細り」を招いたことである。過去20年間の状況を見ても、2001年の9.11事件においては安全保障、2011年の「アラブの春」においては民主化の文脈で、「警戒・管理されるべき対象(スポイラー)」としてのみ扱われる傾向が強まった。

以上のことを踏まえて、本研究は、長年にわたって中東のイスラーム主義運動の研究に努めてきた研究者が協働し、個別事例のさらなる実態解明を目指すとともに、その比較研究を通して、運動の帰結に関する分析枠組みの構築を試みるものであった。現地語を駆使した原典解析とフィールド調査を双柱とする地域研究の手法で個別事例を精査すると同時に、「民主化」と「安全保障」という共通のコンテクストを設定することで比較研究を進め、運動がもたらす政治的帰結についての一般化・理論化の方向性を探った。この点において、本研究は、長年アポリアが指摘されてきた社会運動論と比較政治学、および地域研究と比較政治学の架橋を目指すものと位置づけられた。

2. 研究の目的

本研究は、大きな政治変動を経験している2010年代の中東諸国におけるイスラーム主義運動の思想的・組織的実態の調査・分析を進め、その政治的な影響に関する比較分析および一般化・理論化の枠組みの構築を目指すものであった。具体的には、ムスリム同胞団を中心とするアラブ諸国のイスラーム主義運動について、(1)運動の政治的帰結(民主化、権威主義体制の持続、内戦)に着目し、その違いを生んだ要因を「民主化」と「安全保障」の2つのコンテクストを共有しながら比較検討し、(2)その上で、申請者がこれまで研究に取り組んできた他地域(中南米と東南アジア)の社会運動の経験や社会運動論・比較政治学の諸理論を参照することで、一般化・理論化の方向性を追求した。

3. 研究の方法

中東各国の個別事例を扱う研究分担者4名と連携研究者1名は、各事例の対象国で海外共同研究機関及び共同研究者と現地調査を協働実施した。調査の成果は、「実証研究(個別/比較)」、「理論研究」、「総括」の3つのフェイズからなる研究会合の開催サイクルを通じて、メンバー間で知見の共有と一般化・理論化への着実な前進を確認できる体制をとった。研究期間を3年とし、全体を9ヶ月ごとの4段階にわけ、各段階で1つのテーマについて比較分析枠組みの検討を行った。第一段階は、イスラーム主義運動の実態解明、第二段階は、運動の帰結を規定した要因の特定、第三段階は、運動の政治的帰結の比較/理論研究、第四段階は、社会運動の帰結研究の一般化・理論化の追求、であった。3つのフェイズを1サイクルとして4段階の螺旋を上っていく体制を採用した。

研究実施国・地域については、中東では、ムスリム同胞団が「民主化」と「安全保障」のコンテクストにおいて大きな影響力を有しているエジプト、ヨルダン、シリア(渡航不可のためレバノンとトルコ)、クウェート、カタールの6ヶ国、欧州では、同胞団メンバーが多数亡命している英国・仏とした。

4. 研究成果

2016年度は、上記の4つの段階における第一段階の完了(2016年12月)、および第二段階の開始(2017年1月~)を行った。研究対象国ごとに、イスラーム主義運動のあり方とそれを取り巻く政治環境および他のアクターとの関係に関する調査を実施した。その後、中東各国のイスラーム主義運動の政治的帰結とその規定要因の特定に着手した。第一段階は、エジプト、ヨルダン、シリア、クウェートのムスリム同胞団系組織とレバノンのヒズブッラーの思想と活動の実証研究であり、それぞれ現地調査と原典解析を二本柱とする個別の調査・分析を行った。その成果は、スロヴェニアでの米国 International Studies Association (ISA) 主催の国際学会(2016年6月)、英国中東学会(BRISMES)(同7月)、上海での中東政治に関する国際会議(同9月)を通して国際発信をし、各国の研究者からのフィードバックを得た。第二段階は、中東各国のイスラーム主義運動の政治的帰結とその規定要因をめぐる比較理論研究であり、その予備的なフェイズ(研究計画では「総括フェイズ」と名付けられた)として、社会運動論やイスラーム過激派の専門家をゲストスピーカーとして招聘したシンポジウム(1月)を開催した。これらの研究活動を通して、イスラーム主義運動の政治的帰結を(1)運動自体の変化と、(2)運動が政治にもたらした変化の2つに分類し、それぞれ個別の因果推論を行うことの重要性が確認された。

2017年度は、中東各国のイスラーム主義運動の政治的帰結とその規定要因について、比較研究および一般化・理論化への方向性を定めるための研究とその成果の発信を行った。具体的には、4つの段階からなる3年間の研究プロジェクトの第二段階「中東各国のイスラーム主義運動の政治的帰結とその要因の特定」を完了し(2017年9月)、第三段階「その規定要因についての比較/理論研究」を開始した(同10月)。第二段階については、日本比較政治学会(同6月)にて末近と吉川が社会運動の政治的帰結に関するパネルに参加(討論者と研究報告者)することで、また、7月にキューバのハバナで開催された米国ISA-GSCISにおいて末近、横田、吉川がイスラーム主義運動を取り巻く環境を国際関係の観点から分析した研究報告を行うことで、国内外の研究者からのフィードバックを得た。第三段階については、12月にはゲストスピーカーを招聘し、一般化・理論化に向けてのワークショップを大分・APUで開催した。なお、追加データの充実化および比較研究の事例探求のために、末近、横田、石黒が欧州のムスリム同胞団系組織の、吉川がヨルダンのIAFの実態に関する現地調査をそれぞれ行った。

2018年度は、まず、2018年6月末までに、研究計画に記された研究の第三段階である「イスラーム主義運動の政治的帰結とその規定要因についての比較/理論研究」を終了した。その上で、次に、7月から12月にかけては、最終段階の比較分析枠組みの検討を実施した。この一連の作業を進めていく上で実施した研究の内容は、次の3つに集約できる。第1に、中東以外の地域での事例との比較による理論化の方向性を示した。具体的には、研究代表者の末近がシンガポールの過激派対策センターでの現地調査を行い、「脱過激化」のリハビリテーションの方法を解析することを通して、人びとがなぜ過激化するのか、その要因を検討した。そして、中東諸国で行われてきた取り組みとの比較研究を実施し、イスラーム主義運動の過激化/穏健化を左右する要因を政治体制や社会構成の違いの観点から分類することを試みた。第2に、中東諸国におけるムスリム同胞団系の組織の最新動向の調査を実施した。研究分担者の石黒と吉川は、それぞれカタールとヨルダンにおけるムスリム同胞団系の勢力の現地調査を、横田は欧州に亡命中のエジプトのムスリム同胞団メンバーへの聞き取り調査を行った。第3に、これらの地域間比較と実証研究の取り組みを総合して、中東のイスラーム主義運動の政治的帰結を左右する要因を浮き彫りにし、それを捉えるための新たな分析枠組みの検討を行った。

イスラーム主義運動の政治的帰結は、運動自体の変化をめぐる因果推論と、運動が及ぼした政治や社会の変化をめぐる因果推論の2つによって分析することができる。しかし、現実には、それぞれの変化は不可分であり、イスラーム主義運動の「なに(what)」と、それがもたらす政治現象をめぐる「なぜ(why)」の両方の問いを組み込んだ学際的ないしは融合的な分析モデルの適用が重要であることが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計21件)

横田 貴之、エジプトにおける憲法改正議論 スィーサー政権下の「安定」の持続を求めて、中東協力センターニュース、査読無、43巻(11)、2019、11-18

末近 浩太、レバノン総選挙：「ヒズブラー躍進」の意味(世界の潮)、世界、査読無、No.910、2018、25-28

末近 浩太、9年ぶりに実施されたレバノン総選挙：「イランの影響力拡大」は本当か?、外交、査読無、Vol.49、2018、84-89

末近 浩太、レバノン第19期国民議会選挙とヒズブラーの躍進、中東研究、査読無、533号、2018、68-84

末近 浩太、「IS後」のシリア紛争：輻輳する3つの「テロとの戦い」(焦点：中東の新たな課題)、国際問題、査読無、No.671、2018、37-48

横田 貴之、スィーサー政権下のエジプトにおける選挙と権威主義体制、国際問題、査読無、No.676、2018、15-25

横田 貴之、「安定」から読むエジプト情勢 スィーサー大統領の政権運営を中心に、インテリジェンス・レポート、査読無、121、2018、14-21

横田 貴之、エジプトにおける第2期スィーサー政権の発足、中東協力センターニュース、査読無、34巻(4)、2018、29-36

吉川 卓郎、ヨルダンにおける「アラブの春」民主化運動とその帰結 ムスリム同胞団運動の事例から、日本比較政治学会年報、査読有、20号、2018、167-192

石黒 大岳、Political Participation of the Muslim Brotherhood in Kuwait: The Impacts of Electoral Reforms and the Arab Uprising、IDE Discussion Paper、査読無、No.730、2018、1-15

横田 貴之、大統領選挙を間近に控えたエジプト：「安定」をめぐる政治・経済の現状分析、中東協力センターニュース、査読無、42巻(11)、2018、24-34

末近 浩太、Strategies, Dynamics and Outcomes of Hezbollah's Military Intervention in the Syrian Conflict、Asian Journal of Middle Eastern and Islamic Studies、査読有、12巻(1)、2018、89-98

DOI: 10.1080/25765949.2018.1436131

末近 浩太、中東政治におけるイスラーム主義運動：古くて新しい問い、中東協力センタ

- ーニュース、査読無、42巻(2)、2017、17-27
 横田 貴之、Egyptian Politics and the Crisis of the Muslim Brotherhood since 2013、
 イスラーム世界研究、査読無、10巻、2017、19-31
 横田 貴之、スィーサー政権が直面する内政上の諸課題：テロと経済低迷に苦慮、支持
 率も低下傾向、インテリジェンス・レポート、査読無、101巻、2017、28-35
 石黒 大岳、Utilising the Judiciary to Reject the Popular Will? Legal Mobilization
 after the Arab Uprising in Kuwait、IDE Discussion Paper、査読無、653巻、2017、
 1-14
 吉川 卓郎、ヨルダン：政治と社会運動のゆくえ、アジ研ワールドトレンド、査読無、256
 巻、2017、14-15
 末近 浩太、シリア紛争の(批判的)地政学：「未完の物語」としての「シリア分割」(特
 集 いまなぜ地政学か：新しい世界地図の描き方)、現代思想、査読無、45巻(8)、2017、
 109-119
 末近 浩太、レバノン：「決めない政治」の行方、アジ研ワールドトレンド、査読無、256
 巻、2017、12-13
 横田 貴之、エジプトの「安定」に関する再検討：スィーサー政権下の治安・経済を中
 心に、インテリジェンス・レポート、査読無、93巻、2016、33-41
 21 末近 浩太、シリアの危機をどう捉えるか：「未完の物語」としての「シリア分割」、日本
 の科学者、査読無、51巻、2016、12-17

[学会発表](計16件)

- 末近 浩太、レバノン：「決めない政治」をやめるフリをすることを「決める」、シンポジ
 ウム「アラブの心臓」に何が起こったのか：現代中東の実像を捉える、2019
 吉川 卓郎、ヨルダン-ハーシム家レジームの清算と継承、シンポジウム「アラブの心臓」
 に何が起こったのか：現代中東の実像を捉える、2019
 横田 貴之、エジプト 「安定」は虚像か実像か?、シンポジウム「アラブの心臓」に何
 が起こったのか：現代中東の実像を捉える、2019
 末近 浩太、Competitive Statehood in Syria under Conflict: A Poll Survey Analysis、
 The Fifth World Congress for Middle Eastern Studies (WOCMES)、2018
 吉川 卓郎、Reassessment of Hashemite Kingdom of Jordan's Military Capabilities
 before/after the Arab Spring、Eurasian Studies Quarterly special issue on post-ISIS
 Middle East: research workshop、2018
 石黒 大岳、Political Behaviors on Elections in Kuwait: The Adaptation to the
 Electoral Reform by tribes and its Socio-economic Consequences、Gulf Research
 Meeting 2017、2017
 吉川 卓郎、ヨルダンにおける「アラブの春」民主化運動とその帰結：ムスリム同胞団運
 動の事例から、2017年度日本比較政治学会、2017
 横田 貴之、Comparing the Co-optation of the Opposition between Mubarak and al-Sisi、
 Religious Exchange and the Public Sphere in the Contemporary Middle East Workshop、
 2017
 末近 浩太、'Sectarianisation' of the Syrian Conflict: Hizballah's Military
 Intervention and Redefinition of 'Resistance'、The Conflicts of Powers in the Middle
 East: States and Non-States、2017
 末近 浩太、吉川 卓郎、横田 貴之、Re-formation of the Anti-Islamist Security
 Alliance in the Middle East: The Post-Arab Spring-Egypt's Foreign Policy Strategy
 and its Dynamics、ISA-GSCIS Workshop 2017、2017
 横田 貴之、State Repression and Islamist Survival Strategy: Case of Muslim
 Brotherhood in Egypt、International Conference on "Reconstructing State Security
 and National Integration in the Middle East"、2017
 末近 浩太、Strategies, Dynamics, and Outcomes of Hizballah's Military Intervention
 in the Syrian Conflict、International Conference on "Reconstructing State Security
 and National Integration in the Middle East"、2017
 末近 浩太、吉川 卓郎、横田 貴之、A New Authoritarian Alliance over the Muslim
 Brotherhood? Egypt's anti-Islamist Foreign Policy and Re-formation of the Arab
 Security Alliance、CEEISA-ISA 2016 Joint Conference、2016
 末近 浩太、The Rise of the Pan-Shiites Militia Network: Hizballah's Military
 Intervention in the Syrian Conflict(s)、BRISMES Annual Conference 2016、2016
 末近 浩太、Redefining 'Resistance': Hizballah's Military Intervention in the Syrian
 Conflict and its Consequences、The 5th International Forum on Asia and the Middle
 East、2016
 石黒 大岳、クウェート議会選挙における部族集団の投票行動と分配政治、日本選挙学会、
 2016

〔図書〕(計7件)

高岡豊、溝淵正季、末近浩太、濱中新吾、白谷望、清水謙、岩坂将充、高尾賢一郎、横田貴之、山尾大、「アラブの春」以後のイスラーム主義運動、ミネルヴァ書房、2019、336(9-28)末近、(181-203)横田

Stephane Lacroix, Shiozaki Yuki and Yokota Takayuki, The Muslim Brotherhood within Islamic Geopolitical Dynamics: Developments in Saudi Arabia, Malaysia, Indonesia, and Egypt, Center for Islamic Studies, Sophia University, 2019, 48(39-43) Yokota 末近浩太、イスラーム主義：もう一つの近代を構想する、岩波書店、2018、256

村上勇介・帯谷知可・宇山智彦・梶谷懐・大津留(北川)智恵子・岡本正明・長岡慎介・石井正子・末近浩太、秩序の砂塵化を超えて：環太平洋パラダイムの可能性、京都大学学術出版会、2017、288

石黒大岳、村上拓哉、堀抜功二、白谷望、錦田愛子、アラブ君主制国家の存立基盤、アジア経済研究所、2017、172

私市正年、浜中新吾、横田貴之、松尾昌樹、今井真士、岩坂将充、岩崎えり奈、金谷美紗、北沢義之、吉川卓郎、石黒大岳、小林周、清水雅子、清水学、白谷望、末近浩太、鈴木啓之、高岡豊、辻上奈美江、松本弘、山尾大、中東・イスラーム研究概説：政治学・経済学・社会学・地域研究のテーマと理論、明石書店、2017、392(19-28)末近、(29-38)石黒、(39-47)吉川、(233-240)横田

松尾昌樹、岡野内正、吉川卓郎、溝淵正季、末近浩太、岩崎えり奈、渡邊祥子、金城美幸、円城由美子、今井宏平、村上拓哉、坂梨祥、吉岡明子、江崎智絵、堀抜功二、井堂有子、平井文子、岩坂将充、細田尚美、中東の新たな秩序(グローバル・サウスは今 第3巻)、ミネルヴァ書房、2016、362(41-58)末近、(284-302)吉川

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：吉川 卓郎

ローマ字氏名：KIKKAWA, Takuro

所属研究機関名：立命館アジア太平洋大学

部局名：アジア太平洋学部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：30399216

研究分担者氏名：横田 貴之
ローマ字氏名：YOKOTA, Takayuki
所属研究機関名：明治大学
部局名：情報コミュニケーション学部
職名：専任准教授
研究者番号(8桁)：60425048

研究分担者氏名：石黒 大岳
ローマ字氏名：ISHIGURO, Hirotake
所属研究機関名：独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所
部局名：地域研究センター中東研究グループ
職名：研究員
研究者番号(8桁)：30611636

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。